

最近に於けるフランス中世経済史の研究動向

宮本, 又次

<https://doi.org/10.15017/4362422>

出版情報：経済學研究. 21 (4), pp.33-66, 1956-03-20. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：

最近に於けるフランス中世經濟史の研究動向

宮 本 又 次

最近に於けるフランス社會經濟史學の研究は寧ろ近世・近代史に重点があるといつてよいであろう。近世史に関する多彩なる研究成果にはまことに刮目すべきものがある。しかしながら中世史に関する研究も決してないがしろにされているわけではない。従来の克明なる成果をふまえて、その伝統の上に新見解として見るべきものが少くないのである。ここでは中世經濟史の研究の動向を最近の十年間位を限つて窺つて見たい。中世という時代は、しかしながらどこをいうのであろうか。時代区分の問題は常に困難であり、いまもなお歴史家を悩ましつづけている最大の課題であるといつてよからう。どこに中世の範圍と限界をもつてくるかということとは最も歴史家の関心を惹いていることがらだといえよう。古代の断落と中世への接合をどこにもつていくかということとはつとにピレンヌが「マホメットとシャルマーニュ」(Mahomet et Charlemagne, 1937) に於て考慮せる所であるが、以来いくたの歴史家がこの焦点をめぐつて論議を重ねているので

ある。かつてビレンヌは中世の発端をアラビヤ人の侵入に結びつけて説いていたが、今日の学界人は必らずしもこれを肯べなつてゐるわけではない。あるものはコンスタンチン大帝の時代少くとも四世紀にそれを求めている。そしてここに新しい歴史の時代を劃そうとしている。またあるものは伝來的の考え方、即ち五世紀に中世のデビューを考へるもので、矢張ゲルマンの侵入に重点を置いてゐる如くである。この問題の興味はいまもつきないであらう。しかし今日の歴史家はこの点にもはや一時程の関心を示してゐないのではないであらうか。かつて一九二五—一九四〇年の歴史学界においてこの点が論議され、華かな脚光をあびた様なことは今日ではもう過去のことになつてゐる。中世の末期についてはどうか。封建制より資本制への移行は矢張論議の岐れる所であらう。これは資本主義を如何に定義し、封建制度を如何に理解するかによつて説がわかれているといわねばなるまい。しかし一般には一三〇〇年頃に境界をおくことに一致している様だ。しかし一四—一五世紀、中世の後期をいかにとりあつかうかということは問題でもあるし、この時期はもつとも面白いのである。

フランスの大学に於ける中世経済史・社会史への講義や研究は依然として盛んである。

いずれの大学に於てもこの問題は専門家の心を惹いている所である。しかし、社会経済史家の共通の興味は矢張資本主義の成立にあり、近代史にあるのではないか。パリ大学に於てもラブルース Labrousse を初めビラル Vilari・ムーブ Meuvret・ゴンベール Gonbert・モラゼ Morazé・ローム Lhomme・フェーブル Lucien Febvre・ルーイオー Leuillot の俊秀はいづれも近世又は近代経済史の専門家であるといつてよい。中世期への攻究は社会経済史の場合以前に

くらべて弱まっているといつてよいであらうか。いまパリ大学に於て中世史の経済的社会的考究がいかになされているかを概観的に見て行こう。いま本年度に於ける講義題目から窺つて見よう（一九五五—一九五六）

まず大学部であるが、ホーチエ教授（Professeur Fautier）が中世史の研究をなしている。九八七年から一四九八年にいたる公的の制度を取扱っているが、これは寧ろ一般史・政治史的なものと考えられる。エドモンド・ペラン（Perrin, Ch-Edmond）は中世史の題目の下に中世ドイツの封建制を取扱っている。（例えば Perrin, Ch-Ed; La société rurale allemande, d'après un ouvrage récent, Revue historique du droit français et étranger, 1945 の論文がある。）フエロア（Edouard Ferroy）は封建制（La féodalité）に關する講義をはり、ルノール（Renouard）は中世経済史の講義題目をもつて、一般的に中世経済史を取扱うと共に、イベリヤ半島に於ける十四・十五世紀の経済生活について論じている。法学部に於てはロームをはじめブエスニエ Besnier, モーニエ Monier, ヴィリエ Villiers 等が制度史と社会事実、経済的事実の歴史の講義をしている。しかしこれは矢張近代史である。次にエコール・ブラチーク・デ・オート・エチード（Ecole pratique des Hautes Etudes）に於てはどうか。社会経済史は二つの部門にて行われている如くである。即ち第四科の歴史科学と哲学との分科（Section des sciences historiques et philologiques）であり、他は第六科の社会経済科学分科（Section de science économique et sociale）である。そもそもエコール・ド・オート・エチードというのは一八六八年にビクトール・デュリー（Victor Duruy）によつてもうけられたもので、理論的教授の側にあつて、それを強化し拡充せんと目的をもち、実習・演習に重きをおくもので、六分科に分れている。数学・

物理化学・自然科学・歴史と哲学・宗教学・経済学と社会学の六である。第四分科に於てはモウゼとラブルースの二氏が経済史を講義しているが、中世については別にコルナエール (Emile Coranaert) の講筵を注目すべきである。それは十五・十六世紀についてのものであるから、中世史とはいえぬが、多少とも関連をもつてであろう。ここでは有名なるロベール・ブートルューシユ (Robert Boutruche) の中世史があつて、社会経済史への関心を示している。十五世紀のフランスの貴族についてのべ、又別に九世紀より十三世紀の末期に至る封建社会とその環境の制度を取扱つている。かつて日本にも来て日仏会館々長となり、「鎌倉時代」の著書もあるロングレイ (F. Jolien des Longrais) がイギリスの法制史を論ずるのみならず、一〇六六年から一四八五年に至る英仏の教会法制を教えている。法制史ではあるが、社会経済史への関係課目として重要性をもつてであろう。

第六分科では中世史に關してはロンバルド (M. Lombard) のものを挙げねばなるまい。七世紀乃至九世紀の征服移民に關する社会経済史的側面をあつかひ、又十六世紀に於ける回教徒世界の経済を論述している。更に講師のシュワアルチェノース (Simun Schwarzfuches) は中世に於ける猶太人社会の経済構造と経済的役割を論じている。地理的歴史の課目の中にエル (C. Heller) の古代及び中世に於ける信用の歴史的研究を見出すであろう。法律社会学の講義課目の中にペトール (Petot) のものが興味ありげである。フランス封建制の経済的側面と荘園の財政についての講義である。

Collège de France の第二部は Sciences philosophiques et sociologiques であるが、そこで本年度は教授コルナエール (Emile Coornaert) が十七・十八世紀の商社会と植民についてのべると共に中世末期に於けるヨーロッパの商

業一般をとりあつかつてゐる。又第三部 *Sciences historiques philologiques et archéologiques* に於て Roger Dion は *géographie historique de la France* の題目をもつてブドウ畑の歴史やブドウ酒商業の歴史をとりあつかつてゐる。またブルウデル F. Brudel は Lucien Febvre の講座をうけついで人であつて、本年は十六—十八世紀を取扱つてゐる。他の大学例えばストラスブール、トゥルーズ、モンペイエ、リエージュ・リールなどには立派な経済史の教授がいるが、中世史についての経済史的関心は近世に比べると多くは払われていないと考へてまぢがいない。

二

中世経済史に関するガンのピレンヌの業績と影響ははかりしれない。ドブシュの残映も大きいが、フランス語系の学界にはやはりピレンヌのそれが圧倒的に大きいといえよう。商業史的に見て、中世の成立をどの辺に考へるべきであるかとの問題をめぐつてアンリ・ピレンヌ (Henri Pirenne) の所論についての論争がいまなお活潑であることを注目せねばならぬ。ピレンヌの旧稿は今日では *Histoire économique de l'occident médiéval*, Bruges, 1951 なる論文集をもつて知ることが出来る。ピレンヌを思うとすぐその後継者と考へてよいベルギーのガンスオーフ (Ganshof) が思い浮ばれる。フランスの経済史、社会史学会とベルギーのそれとは、矢張若干のニュアンスと隔りはあるにしても一体として包括的に考へないとその学問的交流の緊密さからいつて妥当ではないと思ふ。だからここでは必要な限りベルギーのそれをも含むことを許されたい。

中世は近世が国家的国民経済的であるに反して著しくインターナショナルな点が濃厚であることを認めざるを得ない。中世をインターナショナルナリズム internationalism の見地から考える人の一人に上述のガンズホーフがいる。彼がその独創的な書物をこれにあてているのは注目してよからう。(Histoire des Relations Internationales 1. Le Moyen age, Paris, 1953) ガンスホーフはそれによつて王や国の関係ではなくて、即ち単なる外交に限らず、巡礼の問題やユダヤ人や外国人の地位問題、国境の設定、外国の地に於ける商人的植民の問題などを大きく取りあげているのである。そこでは記述的説明的な歴史家の立場が組織化・綜合化の解明的立場とうまく調和しているのである。かくて中世史の古めかしいテーマが新しい衣をつけて浮び上つているといつてよい。それは云わば組織化的モノグラフィイ (monographie systematique) とつゞけてよぶであらうか。それは言葉の本当の意味に於ける歴史的综合 synthese historique とつゞけるであらう。最近に出たケンブリッジ中世史要 (Shorter Cambridge Medieval History) は初めは Previé Orton によつて、ついで Philip Grierson によつて完成されたもので、その見事な出来ばえはいくら評価しても評価しすぎるといふことはないと思うが、なんといつてもそれは要約という所に長所をもつもので、レジュメ resume であつても本当の意味での総合 synthese とはいえない。長い探求の歴史と、願望とをもつて育つて来たフランス系史学に於ける綜合の問題はやはりこのガンズホーフの研究などが代表作なのでないであらうか。こうした意味でのモノグラフィイ的研究はフランスではドゥウリンゲル Dollinger、モリアー Mollat、ブートルニューシユ Bouthuche によつてあちやかになしとげられているといつてよからう。なおこの点に ついては例のカルメット J. Calmette の論文、封建的世界 Le monde féodal (Collec-

tion "Chio") をあげねばなるまい。これはイグナー Ch. Hignouet との協力によつてなしたげられたものだ (Paris, 1951) 最近のフランス史学の傾向はもとより社会経済史学の重視にあるが、政治史も閉却されているわけではなから。しかし政治史と題しても、その中で社会経済史学に多くの連関をもつてゐるものが少くない。中世の初頭についてはラアトリー R. Latouche, Les grandes invasions et le crise de l'occident au Vème siècle (1946) をあげるとよく出来るし、シャルマールニエの時代についてはマルマン L. Halpban, Charlemagne et l'empire carolingien, Paris, 1947 が高い価値をもちつてゐる。前期中世 (haut-moyen âge) については J. Dhondt, Étude sur la naissance de principauté territoriales en France aux IXème et Xème siècle (Gand, 1948) がよいが、とりわけ第一級のものをとつては故フェルミナン・ロートの見事な綜合である「フランスの誕生」(Ferdinand Lot, La naissance de la France (VI ème XI ème siècle, Paris, 1948) をあげるのが適当であらう。

三

近世史でもそうだが、とりわけ中世の経済史に於ては社会史とわけることが困難であるし、それは不可能に近い。本来の経済史学がめざす様な統計・図表・公式を用いることはいまの所まで中世史の場合は困難な状態にある。大体に於て中世史の経済史的論述はなお記述的であるといわねばならぬ。

シャルル・フェルランデン (Ch. Verlinden) はその著「一般経済史序説」(Introduction à l'histoire économique

générale, 1948) の中で三つの簡単な、しかし明快なる章を中世経済史のためにあてている。また新しい工夫をもつて重要な経済史に関するテキストの選択をなしているが、その中十七まで中世史のものである。フランスに於てはいまの所まだ中世経済史だけの一般書はあらわされていない。たゞブルギーのドエアエール (R. Doehaerd) 女史による「中世ブルギー人の経済的發展」(L'expansion économique belge au moyen âge, Bruxelles, 1946) は簡単ではあるが、なかなかよい本といえる。中世の初期でいつて即ちロマンシアン時代でいつても Salin, E. La civilisation mérovingienne d'après les sépultures, les textes, et le laboratoire, Vol. I Les idées et les faits (Paris, Picard, 1950) などがある。ロマンヌの有名な Mahomet et Charlemagne (Bruxelles 1937) が、いまなお支配していつて、その論議におおくおれしていつても過言ではない。最初のものはロムロ (R. S. Lopez) の (Mahammed and Charlemagne revision 1943) によるが、以来いく人かの人々がこの問題にとりくんだ。そしてロマンヌを批判し、それを修正した。貨幣の問題、とくにヨーロッパの金の消散の問題、そして新しい経済環境の確立については、ロムバル (Lombard) の一連の研究が光っている。

Les bases monétaires d'une suprématie économique. L'or musulman du VII^e ème au XI^e ème siècle, dans Annales (1947)

Mahomet et Charlemagne, Le problème économique dans Annales (1948) ロマンヌに対する批判的研究である。

La route de la Meuse et les relations Jointaines du pays mosan entre le VIII ème et le XI ème siècle, dans *L'art mosan, Journée, d'études*, Paris 1952.

それらはいずれもよく調査され、工夫を凝らしてはいるが、又或る意味では仮定的であるところもある。またチイポロ (C. M. Cipollo) が次の如きものを書いている。

Encore Mahomet et Charlemagne, L'économie politique au secours de l'histoire dans *Annales* 1949

かつてアメリカの学者マクス (A. R. Lewis) は *Naval power and trade in the Mediterranean 500-1100* (Princeton, 1951) に於て地中海に於ける経済的統一を破じたのはブラブツであるものの寧ろビザンチンであるとの新説を出している。それはある程度ビュンヌ説を動揺せしめるに足るものといえよう。彼は五世紀なごし八世紀に於けるカールの大西洋岸に於ける商業航海の重要性を指摘しているのである。(Le commerce et la navigation sur les côtes atlantique de la gaule du V ème au VIII ème siècle (Le moyen âge 1952) 更に *Encore Mahomet et Charlemagne, Revue historique* 1954 に於けるロム (E. Perroy) などの問題について最近の若干の問題をとりあげ、貴重な考慮を披いてゐる。またヒムリー (Fr. J. Himly) の貴重な論文は前記のロムニールの一連の研究にたいし批判をあたえている。ヒムリーの論文は "Y-a-t-il emprise musulmane sur l'économie des états européens du VIII ème au V ème siècle, *Revue suisse d'histoire* V. 1955 である。

この様でいつまいつまいつビュンヌをめぐって論争を批判がいつひなれづつあるところとはいまビュンヌのイデーの豊富や

にものとすべくものである。中世初期の問題はいきまなおドレンヌをめぐって行なうことも過言ではなからう。

四

社会と社会階級については論文のあらわれたものが数多い。またなによりもマルク・プロックによつておこなわれたペラン(Ch. Ed. Perrin)の指導下になされた二つの論文をとりあげねばなるまい。一つはドウリンゲルのもの、他はデュビエのものがである。

Ph. Dollinger "L'évolution des classes rurales en Bavière depuis la fin de l'époque carolingienne jusqu'au milieu du XIII^{ème} siècle, 1949. G. Duby "La société aux XI^{ème} et XII^{ème} siècles dans la région mâconnaise" 1952

ふたつとも Ch. Edmond Perrin は 著 士 監 査 員 Membre de l'Institut であり Professor d'histoire de moyen âge à la Sorbonne であるが、その La seigneurie rurale en France et en Allemagne du début de IX à la fin du XII^e siècle は 講義案として秀れたものである。

ドウリンゲルはドイツの農村階級の状態が、カロロ時代にはあまり他と変らなかつたのに、次第にその固有の生活をいかにして変える様になつたか、そしてフランスとドイツとがいかにして違つたものになつて来たかを示している。デュビエは亦地方的なモノグラフィをなしたげたのである。俗人の社会を描いて鋭く、その環境を離れさせないで、家族や財

産の歴史をたずねながら結びあわすつらなりをもとめているのだ。経済・制度・社会・政治が調和的に彼のメンの下に結合されていると信じているのである。

農奴についてはその一般性に関するものが多い。ヒュンローヤとサリンダスのものもあるし、又ブーヤンシーヤ (R. Boutruche) のものも問題作である。Robert Boutruche, *La crise d'une société seigneurie et paysans du Bordelais pendant la Guerre de Cent Ans, Strasbourg, Paris, 1947* は一九四四年六月十六日のレキスタンスの名著ある處にて死んだソルボンヌの Marc Bloch の記念に捧げられたもの。これは Robert Boutruche, *Une société provincial en lutte contre le régime féodale, (L'Alleu en Bordelais et en Bretagne du XI e au XIII e siècle) 1917* という、くボルドー地方史研究でもよく知られる。ホーギール (M. Bousnard) はインシ・ブロッタに従がついて Colliberti の状態を定義することに興味ある注意をひいた (M. Bousnard, *Serfs et Colliberti dans Bibliothèque de l'école des chartes, 1947—1948*)。又セーロー Genicot などと Namurois の梓の中で貴族の起源の問題をとりあげた。

Le Genicot, Sur les origines de la noblesse dans le Namurois dans *Revue d'histoire du droit, XX, 1952*

Do; Le destin d'une famille noble du Namurois, dans *Annales de le Société Arch de Namur, 1953*

Do; De la noblesse au lignage dans *Revue belge de Philologie et d'Histoire, 1952*

社会階級の中で、その特殊なる性格の故にとりわけ専門家の注意を惹起するのは奴隷であるが、これはフランス自体にはなく、ローマ時代・ガロ・ローマ時代の特別な存在であると意見の一致を見ている。しかしらばいかにしてこの奴隷がなく

なつたかは興味ある問題でなければなるまい。これに関して故マルク・ブロックの論文はその示唆によつて人々の胸をえぐるのである。(Comment et pourquoi finit l'esclavage antique, Annales, 1947)

五

農業史の研究はその殆んどがいまなおマルク・ブロックの「基本的性格」の業績に負うてゐるといつてよからう。ブロックの新版は一九五一年に出た。(Bloch M. Les caractères originaux de l'histoire rurale française, Paris 1951)

Marc Bloch の成果は一九四〇年代に続いて戦争にともなう障碍を排除しつつ続々と発表された。とりわけ A. Détége, L. Génicot, R. Boutruche, L. Verreil, Ph. Dollinger 等の農業社会の構造に関する一連のモノグラフィ―は常々何等かの程度に於て Bloch の前掲書をまねまねしてゐる示唆から刺戟をうけてゐるのである。Ch. E. Perrin の Recherches sur la seigneurie rurale en Lorraine, 1955 は地方的個別研究への途を開いたものであるが、以来十一世紀以降の農村社会の精密なる分析が行われるに至つた。

一九三一年頃からマルク・ブロックの死に至る期間の彼の著作、論文はまだ全部発表されていない。彼の晩年の思想をうかがうにたるこれらの論文の出現を待望するものである。なお G. Ligerard, Le régime rurale de l'ancienne France, 1942. は農業全体の概説として便利である。この点からいつて一層注目すべきことはいままで殆んど不可能の如

く思われていた中世ヨーロッパの農業全体に関する総括が出来たことであろう。これまで一國の国民的範圍に限り、それから出る勇氣のなかつた學者をしてより広い範圍に研究を披けさせたのである。即ちグランとブウラアトウーシエとの共著「中世の農業」がこれである。(R. Grand et R. Delatouche *L'agriculture au moyen âge de la fin de l'Empire romain au XVI ème siècle*, Paris, 1950) 今古文書を駆使して農業技術の變遷をあとすけているが、とにかくもフランスに中心があり、補助的にイギリスを取扱っている程度であることは、この仕事の困難を思わせるであろう。しかしながらマルク・ブロックによつて開かれた道を有効に進んでいるといえる。また、ブートルーシエ R. Boutruche の百年戦争時代のポルドー地方の研究は一つの道を開いたものといえる。耕地と森林の土地割合についても研究している。(R. Boutruche, *Le crise d'une société* 1947. A. Talamas, *La société seigneuriale française*, 1050—1270, Paris, 1951. 第一章に於て中世の政治民主的環境、第二章に於てフランス農村の形式をあとかっている。多くはブロックそれに繼ぐ諸學者の業績を綜合したものである。なお中世史に関する示唆に富んだ一書としてここに Ch. Ed Perrin, *Observations sur le marse dans la région parisienne au début du IXe siècle* (A. 1945) をあげておく。Jean Bodin 協会も亦この方面にあてられた書物をあらわしている。(Bruxelles, 1649)

中世の莊園に関してはいろいろのものがあるが、とりわけ農村構造の型に関するものが秀れている。Annales の各巻各号にはこれに関するものを数多く見出すであろう。その多くは農業問題として取扱っている如くであるが、地理学へ呼びかけて問題の解明を期しているものが多い。

Boussard, T, La seigneurie d' Bellème aux Xe et XI e siècles (mél, d' Halphen.)

Ourliax, P. L'hommage servile dans la région toulousaine (mél d' Halphen)

Héyounet, Ch; Observations sur la seigneurie rurale et l'habitat en Romergue du IX e au XIV e siècle
(ann midi 1950)

フランスの問題を圖説するがゆゑ R. Boutruche, Une société provinciale en lutte contre le régime féodal : L'Alleu
en Bordelais et en Bazadais du XI ème au XVIII ème siècles, Rodg, 1947 を取ら。

土地問題については J. Balon, Les fondements du régime foncier au moyen âge, Publ, Anc. Pays et Ass.

d'Etats, VII, Louvain, 1954. Y. Lebel, Hist, administrative économique et financière de l'abbaye de St.

Denis dans la province de Sens, (1151~1346), Paris, 1935

また Y. Bézard, La vie rurale dans le Sud de la région parisienne de 1450 à 1560, Paris, 1929 及び Saint-Germain des Prés について研究せるものがある。パリ地区の生産の發展と農業階級の發展について述べらる。パリ地区はとりわけ都市市場と都市社会によつて演ぜられる役割の特殊なる例である。パリのブルジョアと寺院の資本は百年戦争後の再建に役立つたのである。

なおブルギーの荘園制についてはガンスホーンの論文が立派な教示を与えてくれるのであろう。(Manorial Organization in the Law, Trans of the Royal Historical Society, 1949) フェルジナント・ロートの研究に続いて土地財産

の広げや価値についてのごまごまの形式の研究があらわれてくるが、就中シャイエのものが面白う。それは十世紀から十一世紀に至るブルノーブルの寺院の不動産に關するものである。

Notes sur la fortune immobilière de la cathédrale de Grenoble du X^{ème} à la fin du XII^{ème} siècle dans *Annales de l'Université de Grenoble*, 1946.

農業史部門に於て最も注意されたものはブドウ酒の栽培の歴史であらう。地理学者のディオン R. Dion がとりわけこの問題と取り組んで多くの論文を発表している。

R. Dion, *Viticulture ecclésiastique et viticulture primitive en moyen âge*, dans "Revue historique", *Grands traits d'une géographie vinicole de la France, la viticulture médiévale* (publicat de la Soc. de Geogr, de Lille, 1948~1949)

又 *Annales* 誌でも多くの論文を出している。

R. Dion: *Origines du vignoble bourguignon* (*Annales*, 1950)

R. Dion: *Métropoles et vignobles en Gaule romaine, L'exemple bourguignon*, *Annales*, 1952.

なお地方経済史の白眉としてはマンシエ地方の生活を取扱った次の論考をあげねばなるまい。

Boussard, T; *La vie en Anjou aux XI^e et XII^e siècles* (*Le moyen âge* 1950)

六

中世経済史の研究が農業方面にのみ限られるという風なことは、この国に於てはない。しかし農業史に比べて工業史の研究は盛んでないとは言えよう。たと織維工業史の研究は比較的盛んである。それは寧ろベルギーのフランドルの研究に見るべきものがあまる様に思われる。コルナエール (Emile Coornaert) はフランドル地方の工業史の専門家であるが、農村と都市の毛織物業の相互的な関係について見事な見解を発表している。(Revue belge de philologie et d'histoire, 28 (1900) キー・デポエルク (Guy Depoerck) の La technique et la terminologie de la draperie médiévale en Frandre et Artois もなかなか優秀なものである。コルボラン・モンヤギルドに関する研究はなにも放棄され、見すべかられたわけではないが、かつて即ち一九四五年までほどには流行してはいない。ただ上記のコルナエール (Em. Coornaert) が中世のギルドの起源について新見解を発表したことは一顧の価値があろう。

E. Coornaert, *Draperies rurales, draperies urbaines, L'évolution de l'industrie flammande au moyen âge et au XVI^e siècle* (Revue Belge Philologie et d'histoire, 1950)

エミール・コルナエールはブレメンの衣鉢をつぐものである。教授はホントスホーテヤベルグ地域の農村毛織物工業を詳細に分析して、ブレメンの研究をいっそう深め内容豊かなものにしてゐる。Emile Coornaert, un centre industriel d'autrefois. La draperie-sayetterie d'Hondschoote, 1930, Do, une industrie urbaine du XIV^e siècle. L'industrie

de la laine à Bergues, Saint-Wince 1930. 彼は宗教的起源を重んじ、ギルデと社会的経済的な要素が出つてくるの
三半世紀の歴史を論じている。

Em. Coornaert, Les ghildes médiévales, V ème XIV ème siècles dans Revue historique 199 (1948)

これはその定義と発展を取扱くものである。E. Coornaert はかねてギルデについて左派な研究をなして来た。Les
corporations en France avant. 1789 (1941) は文献と方法についての系統的な概観を論じているものである。Annales
に収められた Des confréries carolingiennes aux ghildes marchandes (1942) はギルデの歴史を論じている。

また G. Le Bras, Les confréries chrétiennes (Revue historiques de droit français et étranger, 1940~1941)
がある。ノマンデルの毛織物業についての研究はかねて G. Espinas や H Pirenne がこの研究をして来たが、最近では G.
Espinas は次の論文を発表している。

G. Espinas, Les origines du droit d'association dans les villes de l'artois et de la Flandre française
jusqu'au début du XVI e siècle (2, vol 1942) Métiers, associations et confréries du métiers: l'exemple des
Naypiers de Toulouse. (A. 1945)

その他工業史については次の如きがある。

Schneider, T, Note sur l'organisation des métiers à Toul, au moyen âge (mél, H. Halphan)

Zeller, G; L'industrie en France avant Colbert (Rev. d'hist, écon, et sociale, 1950)

Labal, P., Notes sur les campagnes migrants et les sociétés de campagnes à Dijon à la fin du XV^e et au début du XVI^e siècle (Ann Bourgogne, 1950)

十

商業史については如何。

中世の商業については、まず第一に挙ぐべきは「商業史」五冊本の出版であろう。これは J. Lacour-Gayet の指導下に出たものだ (Histoire du commerce, 1950) その中の二巻は大部分 Mme Boulet の執筆にかかるといふ。中世におけるものである。それは常に絶対的に完全でないにしても、明快で便利なものである。ロペイ (R. S. Lopey) のものは短かいが、中世の商業史についてはとりわけ立派である。(Du marché temporaire à la colonie permanente. L'évolution de la politique commerciale au moyen âge dans Annales IV, 1949)

中世前期については細かいろいろの研究が出た。今日ではもう人々はカロランジャン時代の国家がまったく商業活動を無視したとは考えない様になつてしまつてゐる。これに関する論文は多く Annales 誌上に出つてゐる。

R. Dochaerd, Au temps de Charlemagne et des Normands, Ce qu' on vendait et comment on le vendait dans le Bassin Parisien (A. 1947)

地中海の商業についてはランベール (G. Rambert) がその協力者と共に「マルセイユの商業史」(Histoire du

Commerce de Marseille, 1949—1951 5 vol)の大著をものにしてゐる(既刊三冊、一五九九年までの叙述) Histoire du commerce de Marseille—vol I L'antiquité par R. Buequet; le moyen âge jusqu' en 1291. Par Régime Pernoud vol II. De 1291 à 1423 par E. Barattier. de 1423 à 1450 par F. Reynard, vol III, De 1480 à 1515, par R. Callier; de 1515 à 1599 par J. Billioud (3 vol, Paris, Plou, 1956—1) Histoire du commerce de Marseille (IV) De 1599 à 1660

ウォルフ Ph. Wolff のものを初め、いろいろ中世の末期に関する研究が出てゐる。ウォルフのものは「ノルマンズと商業と商人」(Commerce et marchand de Toulouse 1954)である。これは豊富な資料をもつて永らく無視されて来た一つの地方の商業に関する経路を丹念に調査したものである。又モオラブ (Mollat) は中世末期のノルマンの海上商業を取扱つてゐる。(M. Mollat, Quelques aspects du commerce maritime breton à la fin du moyen âge (mémoires de la société à l'histoire et d'archéologie de Bretagne, 1948). (Le commerce maritime normand à la fin du moyen âge 1952) 古文書であるが、海上商業は百年戦争の危機のさへ起つたことを明らかにせるものである。

中世の商業を考える場合、シヤク・クルールの活躍は目撃すべき。モオラブはその協力者と共にこれに関する優秀なる業績を著述してゐる。(Michel Mollat et collaborateurs, Les affaires de Jacques Coeur. Journal du procureur Dauvret, Paris, 1952—1957. 2 vol. 又マリネスコ (Marinesco) のシヤク・クルールの研究も有名である。(Marinesco,

Jacques Coeur et ses affaires aragonaises, catalanes et napolitaines dans *Revue hist.* 205, 1951. Du nouveau sur Jacques Coeur, (mél. L. Halphen)

商業史の中心はフランス酒の取引をめぐったものが目だつてくる。中世におけるフランス酒の商業は非常に重要であつた。就中それに関するルノヴァール (Yves Renouard) の研究が進んでくる。

Renouard, Le grand commerce du vin au moyen âge. *Revue historique de Bordeaux*, 1952

Renouard, Le consommation des grands vins de Bourgogne et du Bourbonnais à la coeur pontificale d'Avignons. dans *Annales de Bourgogne*, 1952

この世にフランス酒類の商業取引に関する歴史的研究が多々出ている。(E. Vaillé, *Histoire générale des portes françaises, Des origines à la fin du moyen âge*, 1947)

交通史に関するフランス・ポルトガル地方に関する論文が多量。例として Godard, T. & Wolf. PH. Un courant commercial à travers la France au début du XI e siècle, de Toulouse aux Pays Bas (*Rev. du Nord*, 1950). Higonnet Ch; Un mémoire sur les péages de la Garonne au début du XIV e siècle (*Ann. Midi* 1947). Lestscqsy, Comment on voyageait au moyen âge (monde français, 1950).

Renouard, Y. Les voies de communication entre pays de la Méditerranée et pays de l'Atlantique au moyen âge, problème et hypothèses, (mél. L. Halphen).

簿記や商業技術に関する研究も盛んであつて、多くの人々が各地の記帳によつて商業活動を個別的に研究している。こうした地道な研究がもとめ我が国にも起つてほやうに思ふ。

貨幣史(し)についてはラフォーリー(Lafaurie)の著書『Les monnaies des rois de France de Hugues Capet à Louis XII. (Vol 1 Paris, Bourcey, 1951)』を初め、多くの論文を見出すべきである。Boutier, P. H. L'or et l'argent en Occident de la fin du XIII e au début du XIV e siècle (C. R. Acad, Inscript et Belles-Lettres, 1951). Boyer, G. Un texte inédit du XII e siècle sur l'atelier monétaire de Toulouse (ann Fac. Droit Aix 1950). Rey. M. Les émissions déçus à la couronne à l'hôtel du monnaies de Paris vers la fin du XIV e siècle et dans les premières années du XV e 1385—1413 (mél L. Halphen)などもその代表的なものである。

八

中世の後期に於ける経済的変遷については、Halperin, J. Les transformations aux XII e et XIII e siècles (Rev. d'hist éco et sociale, 1900. No. 1. et 11.)が興味がある。

十四世紀の中葉から西ヨーロッパは一連の危機を経過する。それは百年戦争によつて深化されたものである。それは社会経済史上非常に重要性をもつてゐる。ブートルーシユ(Robert Boutruche)の「百年戦争中の領土社会の危機とボルネー地方の農民」(La crise d'une société seigneurs et paysans du Bordelais pendant la Guerre Cent Ans,

Paris. 1947) は最も注目すべきものだと思う。また R. Bouché, *La décastration des campagnes pendant la guerre de Cent Ans et la reconstruction agricole de la France* (mélange, 1945, III. Etudes historiques, pp. Le Faculté des Lettres de Strasbourg 1947)

百年戦争の危機がボルドー地方の農民に及ぼせる影響について考察せるもので、領主と農民の関係の中に農業の機能をとぎ、ボルドー市の商業、ブドウ酒の輸出、戦争による破壊、その結果としての不安定を詳しく論じている。一九四九年のアナルに出たペロア (Perroy) の簡単な論文もまた重要といえよう。(La crise du XIV e siècle) à l'origine d'une économie contractée (A. 1949) この時代の矛盾をいかにとくべきか。ペロアはこの時代の矛盾をもとめる。ペロアは主たる原因の税制にもとめている。彼は十五世紀の中葉から十六世紀の中葉にかけて社会は停滞し、平凡なものになったと結論している。この結論はフランスだけのものか又、ヨーロッパ全体のものか。これについて、ヒルトンがアナルに発表した論文は示唆に富んでいる。R. H. Hilton, *Y'eut-il une crise générale de la féodalité ? dans "Annales"* 1951, 彼は十四世紀から既に封建経済の不能があつた、そして生産力の傾斜があつたと説く。

経済史の社会的考察をなす場合、重要なポイントに人口増加と荒地開墾の問題がある。アナルの各巻はこの問題を大きく取扱つている。かつてマルク・ブロックはつとにアナル誌上に *Les Invasions: occupation du sol et peuple* (Annuaire, XVII. 1945) を発表した。ロブリン (M. Roblin) は非常に狭い範囲であるペリの郷土について地名学に基礎をおく人口の研究をなしている。祭祀についても考察している。(M. Roblin, *Le terroir de Paris aux*

époques gallo-romaine en franque. Peuplement et défrichement dans la civitas des Parisii, Paris, 1951.)

開墾を取扱つたものとしてはルトーシユ (R. Letouche) がメーン地方に關して秀れた研究を發表してゐる。(R. Letouche, *Défrichement et peuplement rurale dans le maine du IX^e e au XIII^e e siècle, dans le moyen âge* 1948.) 人口増加については Flandre や Auvergne, や Périgord のものを取扱つた研究が多い。モラーの研究は秀れたものだ。M. Mollat, *Les hôtes de l'abbaye de Bonbourg dans Mélange L. Halphen 1951.* その他次の如きがある。

G. Fournier, *La création de la grange de Gergovie par les Prémontrés de S. André dans le moyen âge, 1950*

P. Angué, *Le conquête du sol en Périgord méridional dans Mélanges, Faucher, 1949.*

史的人口學 (La démographie historique) は中世史家によつて二十年来非常に活潑に取扱われてゐる。とりわけ R. Reinhard, *Histoire et démographie, Rev. historique. 203 (1950)* はその好例である。また次のものも著者の好むものである。

L. Genicot. *Sur Les témoignages d'accroissement de la population en Occident du XI^{ème} au XIII^{ème} siècle dans cahiers d'histoire mondiale, 1952.*

フランシスの一部の都市人口の發展は詳細に F. Lot によつて研究された。Recherches sur la population et la

superficie des cités remontant à la période gallo romaine (1945—1952, 3, volumes, Paris) 殆んどすべての都市の歴史的モノグラフィーは現在人口学的問題に地位をおいているといつてもよからう。専門家の間ではいま人口増加がどこでまわっているかを知ることの問題が一致しているといつてもよからう。十四世紀の中葉にありとするものは一三四九年と一三五一年の間にヨーロッパの一部を荒したペストに関連せしめられている。黒死病とその結果については多くのモノグラフィーの対象となつていゝといふべき。フランスでは Yves Renouard, Conséquences et intérêt démographique de la Peste Noire de 1348 dans Population, 1948 が見立(つ)つた。

九

都市の歴史 Histoire urbaine は矢張りとも社会史的に旺盛なる研究分野といつてよからう。最近の都市研究の動向としては中小の聚落 (agglomération) に注意が向けられているといふことである。又都市形成以前 (Preurbaine) の九一一世紀の頃に關心が向つていゝといえよう。

更に又国民的な枠の範囲の中で綜合(サマール)を試みようとしていることである。そしてアクセントは制度史的な側面よりも経済社会 (économie sociale) の要素の重視に向つていゝことである。また考古学との協力によつて都市の地形学的研究 (topographique) がはちつて来たことである。最も注目すべき労作はプチー・デュテイルス (Petit-Dutaillis) の書物 Les communes françaises, caractère et évolution des origines au XVIII e siècle, Paris, 1947) である。

う。彼は社会的な実在としての都市 (la ville) を研究対象とせず、法制的な実在たるコミューン (la commune) を対象としている。彼の研究は十二世紀にはじまり、コミューンヌの説明的な学説を見い出そうと努めている。彼はそこに宣誓された協会 association juré を見出し、一つの方程式を考えている。即ち Commune = serment commun と、コミューンヌ即ち共同の宣誓なのである。リモンはクール・ロワイの二つのメトロポール (métropole) とあつた。その中 St. Laurent の教会を地下墓所が発掘された。それは七世紀又は六世紀に遡るものである。これはいつか Willeulnier, Audin et Leroi-Gousham の秀れた研究がある。(L'église et la nécropole, S. Laurent dans le quartier Lyonnais de Choulans, Lyon, 1949) と Lombard, M. L'évolution urbaine pendant le moyen âge, Bull. Soc. Marc Bloch de Toulouse, No. 2 1950-1) が大派なものである。

比較的問題を追来して Société Jean Bodin は次の書物を出版している。La ville, institutions administratives et judiciaires, Bruxelles, 1956. ロールル河とミロン河の間の都市の地形学的研究はシローヤ (R. Crozet) によつてなされた。(Paris, 1949) 及び Mulhouse, d'Aire, de Langres, Montreuil sur Mer, Marmende などの研究がなされている。

Moeder, Les institutions de Mulhouse au moyen âge, 1551.

Bertin, Une commerce flammande-artésienne, Aire sur la Lys des origines au XV ème siècle, Arras, 1947.

F. Claudon, Une ville sur temps de l'émancipation communale, Langres du XII^e et au XIV^e siècle dans. *Annales de Bourgogne*, 21 (1949).

J. Lestocquoy, Les origines de Montreuil sur Mer dans. "Revue du Nord" 1948.

Ch. Higonet, Le développement urbain et le rôle de Marmande au Moyen Age, Agon, 1952.

故人となつたエスピナス (G. Espinas) はまづとて都市研究の専門家であつたが、彼の最後の二書はとくに St-Omer, Lannoy du Nord et de Geimes ほかたをふつた。Deux fondations de villes; Saint-Omer et Lannoy du Nord, Paris, 1946. Le droit économique et sociale d'une petite ville artésienne à la fin du moyen âge; Guines, Paris, 1949.

レスサージエ (G. Lesage) は一二六四年から一三四八年に至るマルセイユを描き、港灣の経済的發展に及ぼせる政治的影響について論じてゐる (一九五〇年)

ライエブ港、十五世紀の簿記はキラー (Mollat) をして新しい研究を行わしめる機会を与へてゐる。(Paris, 1951) ルウー女史 (Mille Lehoux) は St-Germain des Paris の町について大著をもちた。この著物で彼女は僧院が都市の萌芽をなすと説いてヒレニスの見解に反駁してゐる。(Paris, 1951) 最も主要なる都市のモノグラフィーはシュナイダー (F. Schneider) が十八・十九世紀のメッツ (Metz) の都市に対してなせるものであらう。(Nancy, 1950) ローマ起源の司教都市メッツはその繁榮の基礎を両替屋や金貸しにおいていた。都市の政府はギルドに何の役目をもたない都市貴

族 *patriciat* によつて支配されていたと述べている。彼等は土地所有や農業企業にその財産を投下することによつて当時としてはイタリヤ以外ではあまり見られなかつた様な広い都市の状態をつくり出したと説いている。またガンスホーフはフランデル伯によつて与えられた都市解放について研究してゐる。(1129年頃) (Ganshof, *Le droit urbain en Flandre au début de la première phase de son histoire dans Revue d'histoire du droit*, 19 (1951)) などガンスホーフの著作の外に F. Vercauteren, *Etudes sur les civitates de la Belgique seconde*, Bruxelles, 1943. J. Lestocquoy, *Les Villes de Flandre et à l'Italie sous le gouvernement des patricien (X e-XVe siècle)* Paris, 1952. H. Weyerke, *Gand, Esquisse d'histoire sociale*, Bruxelles, 1946. フランデル地方については特に商工業及び都市についての調べられた研究が多い。それはこの地方がアルプス以北での先進地区であり、羊毛の特殊生産地帯であるところから、ヒュナスマヤレンヌ以来の専門的伝統のしからしめる所であろう。史料としてはレンヌの前著(1951) H. Z. de Sagher 編纂の *Recueil de documents relatifs à l'histoire de l'industrie drapière en Flandre*, Vol 2, Bruxelles, 1951 が詳しい。毛織物業については *Revue de l'histoire de l'industrie textile* G. de Peerck; *La draperie médiévale en France en Artois*, 3 vols, Bruges 1951 がある。

その他都市の研究には次の如きものがある。

Chaume, M. *Les origines de Dijon* (ann. Bourgogne, 1948)

Combes, J. *Le port de Sérignan* (ann. Midi, 1950)

Combes. J. Les donations à la réparation du port d'Aignes-Mortes (mél L. Halphen)

Musset. L. Les villes épiscopales et la renaissance des églises suburbaines en Normandie (Rev. d'hist de l'église de France, 1948.)

Tournier, Cl. La vie à Dijon de 1420 à 1560 ravitaillement et commerce (ann Bourgogne, 1950)

中世都市の研究に關し、そのブルジョアの成長・活躍・影響に卓越せる研究を見出すものは、この點に關してはストラスブルグやトランスの都市研究が尤もに頭角を現す。Ph. Dollinger, Patriciat noble et patricat bourgeois à Strasbourg au XIV^e siècle dans Revue d'Alsace, 99, (1950—1951) フランケンシュタインの研究はその代表作である。次の論文を註目すべきものである。J. Lestocquoy, Patriciens du moyen âge. Les dynasties bourgeoises d'Arras du XI^e siècle au XV^e siècle, Arras, 1945. Feuchère, Dr. La bourgeoisie lilloise au moyen âge (Annales, 1949). Geoffroy, P. Recherche sur la fortune des bourgeois dijonnais au XV^e siècle (ann Bourgogne 1948).

一〇

法制史が經濟史と深い表裏の關係にあることは、いふまでもない。とりわけ中世史の研究には早くから手をつけているだけ、法制史の方が一日の長があることは、いふまでもない。まず一般的概説書として中世をも大きく取扱つてゐるものを二、三挙げておこう。

Olivier Martin, *Historie du droit française des origines à la Révolution*, Paris, 1948.

Aug Dumas, *Manuel d'histoire du droit français*, Aix, 1948.

Tissert et Ourliac, *Manuel d'histoire du droit français*, Paris, 1947.

封建制度に關してはいまもなおマルク・ブロックの劃期的労作が高い価値をもちつづけているが、これは寧ろ社会経済史に重点がある様である。それに対しベルギーのガンスホーフの名著はいまでは一番大きくクローズ・アップされているといえる。彼の有名なる『封建性とは何ぞ』(Qu'est-ce que la féodalité?)は一九四四年に出、第二版は一九四七年に出た。その英訳は一九五二年に出版された。この書物はいまではもう封建制に關する古典にさえなつている。しかし乍らこの書物の封建性に関する概念は限定されている。即ち人間關係を支配する利権の制度の一体と見ているのである。そしてそれは一定の奉仕を負わず采地 *tenures foncières* の委讓に關するものであると見ている。この書物に於てガンスホーフはかつて一九三九年マルク・ブロックが *la société féodale* にていつた様なことをいわない。ガンスホーフによれば封建性はきわめて狭く、技術的法律的な言葉である。その地域についていと彼は検討の場をかつてカラランジャン王国のあつた範圍と英国とに限つている。ガンスホーフは九世紀から十七世紀にまで括がる歴史時代をすべて封建時代と呼ぶ様な見解をとらない。それはその基底において社会経済史的な見解をとつている人々の見方であり、ガンスホーフは寧ろ封建制を純粹に法律的・制度的なものとして見ている。

なお封建制度の研究に於て貢献をなしている人々は次の如くである。例えば、ルマアリニエ(Lemaignier)はオー

ている。そして領主と農民との土地を媒介とする関係は領地制度 *régime seigneurial, seigneurie* とよんで、封建制度と區別してゐる。(Bouttruche, *Histoire des institutions, moyen âge, Rapports de IX^e congrès international des sciences historiques*, pp. 47—471) 日本の様に封建制度を即農奴制度と考えたりはしない。それから切りはなして法制的制度的又は社会学的な見地からのみ考えている。日本の様に生産様式としての封建的土地所有を基礎とする歴史的な社会構成として理解している所は見あたらない。日本の歴史学界が西欧の自由主義国のそれから隔離し、孤立しているといえる。

又封建制度を論ずる場合常に場合、地域のことを考えている。いつもヨーロッパ、特に西ヨーロッパの場を考えて、そこに於ける具体的な封建制度を一応考えて、その上で概念を設定している。事実が先であつて、抽象的な概念はあとである。概念から出発してものを見るのではない。われわれはもつと西洋の封建制度がどういう学術的用語であるかをよくよく見定めてから立場をたてて云うべきだと思ふ。日本だけの学問の孤立的立場をもつて、無理に西洋の既定事実をひねつて理解することは正しい把握の仕方ではないと思ふ。それが日本の立つている特質なる立場だといふ風な弁解や立論の仕方は長い目から見て学問の進歩の上から損をすると思ふ。

—

西洋中世経済史について考えられる第一の特徴は、それがその関連部門をも含めて極めて広い範囲にわたっているといえる。多様性に富んでいるといえる。農業史の研究が盛んであることはもとより当然であるが、商業・交通史についてもたくましく追求されていることである。又各レジョン毎の地方経済史の盛んなことはもとよりフランスの伝統による特徴であるが、いままなお丹念にそれがおこなわれている。それはなにも全体の一部を研究してもつて全体に貢献しようとするものではなく、単なる一部の地域の中にも全体を蔽う様な具体像があり、その特殊性の中にもものの個性にひそむ実相をさぐるうとしていくかの如くである。

第二の特徴は歴史的綜合である。フランスに於ける綜合の意味は特殊であるが、いまや単なる純粹の出来事の歴史又は歴史家の歴史は終つたかの観がある。少くともある特定のフランスの歴史家はこの種の歴史概念をすてさつてしまつたかの様に見うけられる。されば歴史家の歴史 (*l'histoire historienne*) 以外の歴史というのはい体どんなものか。これはかねてルシャン・フェーブルがとなえている歴史的綜合 (*la synthèse historique*) で、アナルの各号はこれの実現に長い努力をかさねて来ているわけだ。

第三の特徴は方法や歴史技術の上に於て、単なる古文書以上に考古学や発掘や統計に援助をもとめて来たことである。そしてより具体的な現実と緊密に結びつき、現象をより明確にしていることである。

第四の特徴は史学に於ける経済的社会的な方法の重視である。これは現在イタリアやドイツの史学界が精神史に力をいれているのに比較して、フランスが社会経済史に力をいれていることである。しかしそれは何も唯物史観的な歴史学が支配的であるということにはならぬ。経済史学も亦矢張フランス伝統の歴史学の上に立つているといつてよい。従つて機械論的観念論や決定論的なもの考へはあまり歓迎されていない。人間や社会が常に念頭にあり、社会の発現の形式としての人間生活の種々相を浮彫にすることに念願がある如くである。そして経済史学の外にイデーの歴史 (*Histoire d'idées*)、思想の歴史が強く要望されて来ている。

第五の特徴は国民的枠が必ずしも守られていないことである。より広い範囲のいわば世界史的な考慮がはらわれていることであろう。中世や封建時代はいわば国家以前の時代であつて、国民的枠での処理は出来ない。都市と都市との関係や道路や海上航海は国民的な枠を越えて人々を結びつけ、商品を流し、交渉をひろげていく。しかも従来のような各国民の並立 (*justaposition*) ではなしに、そうしたものの眞の綜合に於て理解しようとしているかの如くである。ルシヤン・フェーブルの指導する *Cahier d'histoire mondiale* は中世史の部面に対しても、こうした見解をひろげているといえる。

第六は統計的数量的方法である。最近の経済史学に於ける方向の一つに数量的統計的方法がある。しかしその適応は近代や現在についてはさしずめ可能であるが、中世や古代については統計資料は不足しており、数量的取扱いが困難であることが多い。ギルドの構成員と村落・都市の大いさ、各時代の賃銀所得者と非所得者との割合という風な簡単なことも屢々正確なる解答を得ることがむづかしいのである。しかしそれでもそういう人々によつて数量的図式的取扱いがこ

らみられているのである。のみならず単に資本主義社会の中でものをいう場合は可能であるが、例えば封建制から資本制への移行という風な構造変動をあつかう場合、数量的な取扱いはますます困難となる。われわれは経済史学がやはりすぐれて人間の歴史なること (Histoire de l'homme) を思うべきである。マルク・ブロックがいうが如き全体史 (Histoire totale) に於けるヒューマニスト的概念が常に重要だと思ふ。数量的方法の可能と限界は特に中世史の場合考えねばならぬことにならう。

第七の特徴は段階説・典型説の全くの放棄ということである。典型をもとめたのはドイツ歴史学派の功績であるが、そしてその影響の下になつたフランス経済史学であるが、長い道程の上でその脱却に成功したといえる。典型はつまり歴史の多様性を見失わしめるものであり、論理的なものを一時的なものとを混同することになる。歴史は論理ではない。段階的な考え方はいまでは揚棄されたといえよう。試みに現在のフランスの経済史書を開いて見るがよい。段階的な適用をしているものは殆んどないのである。かつて段階説が経済現象の分類に便利な範疇を与えたことは事実であらう。マックス・ウェバーの理想型は学者をして種々なる史実を対照することを可能ならしめた。しかしいまではこうしたものは経済史研究にとつて有害無益であると考えられている。特にこれによつて学生が歴史の要約と思ひこむならばもつとも有害だとつてよ。

時代区分についても同じことがいえる。一般史の時代区分をそのまま経済史に適用する場合屢々不幸なる誤解をまねくのである。純粹に経済的な時代区分というようなものはない。かくて時代区分も亦仮定的なものと考へている。いまでは寧ろ第何世紀という風な観点から事実の世界を扱つていくものが多い。